

Story #1 国境のまちが伝える「平和の祈り」



稚内市民観光ボランティアガイド

白井 立身さん

宗谷には「国境のまち」ならではの歴史がたくさん。その一部を宗谷岬で感じ、次世代へ平和の願いを伝える。

■宗谷岬と

国境のまち

稚内を訪れる観光客の皆さんが必ずといっていいほど立ち寄る場所の一つが宗谷岬の「日本最北端の地の碑」です。碑の前で記念写真を撮り、空気をいっぱい吸い込んで日本のてっぺんに到達した実感を楽しむ多くの方を拝見しますが、この碑よりわずかに四十三キロメートル先に映る島影がサハリンで、ここ宗谷を「国境のまち」と知る人は少ないと思います。

碑の手前には、今から二百年前、日本とロシア两国民が混在していた土地・樺太が島であることを発見し、世界地図に名を残したただ一人の日本人である間

■国境のまちと平和

宮林蔵の顕彰碑がはるか彼方を見つめています。その姿は青少年に世界に羽ばたく夢と勇気を抱くように言っているようにも見えます。

宗谷岬の南側の高台を上っていくと、はるか昔に形成された周氷河地形の宗谷丘陵がどこまでも見渡せる景色が広がりますが、この一角は宗谷岬平和公園と呼ばれ、「国境のまち」としての歴史を思わせてくれる数多くの碑や建造物があります。明治時代に建てられた「旧海軍の望楼」もその一つ。明治八年に樺太と千島が交換され、稚内は「国境のまち」として緊張感が高まります。この望楼は、日

露戦争の際、ロシア軍艦の「ノーウィック号」が宗谷沖に現れたときに、大いに真価を発揮したとのことです。現在は、現存する明治年代の数少ない稚内市有形文化財として、当時の国境の緊張を今に伝えています。望楼の隣には、宗谷海域で亡くなった海軍の方の鎮魂碑が建っています。この碑は、特に樺太から稚内に航行中の連絡船「宗谷丸」をアメリカの潜水艇から守るために身代わりとなって爆沈した海防艇の乗組員百五十二名の霊を鎮めるために建てられ、「再び戦争を繰り返すまじ」という祈りが込められているのです。

隣にある平和の碑は、宗谷海峡でアメリカと日本の間で繰り広げられた悲痛な



宗谷岬に建つ樺太が島であることを発見した間宮林蔵の立像。これとは別に稚内市街から宗谷岬に向かう途中の第2清浜地区には、間宮林蔵が樺太へ向けて出発した「間宮林蔵渡樺出港の地」の記念碑がある。



“日本のでっぺん”に位置する「最北端の地の碑」は人気の観光スポット。天気が良ければ海の向こうにサハリンが見渡せる。



昭和 58 年に起きた大韓航空機撃墜事件。遭難現場に近い稚内は、事件調査や報道の前線基地として重要な役割を果たした。遭難者の慰霊と世界恒久の平和を願い建立された「祈りの塔」の付近には6月から7月にかけてアルメリアが咲き乱れる。



旧海軍望楼は、明治 35 年に帝政ロシアとの戦いに備えて旧帝国海軍が建設した2階建ての監視所。当時1階には見張り室と待機室、2階には指揮室があり、小窓からは宗谷海峡が一望できた。

戦いによる両国の犠牲者の家族によって建てられたもので、平和を願う両国民の気持ちが進められています。戦後、日本では平和が続いていますが、近隣の国では争いが多く起こっています。

昭和五十八年（一九八三年）、サハリン上空を侵犯した大韓航空機がソ連のミサイル攻撃を受けてモネロン島沖に墜落しました。宗谷岬平和公園で一番高い平和記念碑「祈りの塔」は、この事件で犠牲となった二百六十九名（うち二十八名は日本人）の慰霊と世界恒久の平和を願って全国からの浄財で建立されました。

その隣にある「世界平和の鐘」は、海の彼方にサハリンを望む「国境のまち」に昭和六十三年に日本第一号として設置されました。この鐘は世界平和の願いを広めようと、世界中に建てられています。

■ 平和の願いを次世代へ

戦後生まれが八十パーセントを超える現代、宗谷岬を訪れ「最北端の地の碑」の前で写真を撮るだけの忙しい観光ではなく、「再び戦争を繰り返すまじ」の気持ちを後世に伝えることが私たちの使命ではないかと思ひ、微力ではありますが観光ボランティアの活動を続けています。



「景色だけでなく宗谷の奥深い歴史も感じてほしい」と臼井さん。稚内市民観光ボランティアガイドでは、平成 30 年から夏季限定で「稚内歴史巡りガイド」の案内を行っている。

Story #2 「国境のまち」の歴史が紡いだ物語



稚内市歴史・まち研究会

富田 伸司 さん

戦争の発信地で捧げる平和の祈り。
越冬に震える藩士たちを支えたもの。
宗谷には「国境のまち」の物語がある。

■赤れんが通 信所の物語

稚内空港から内陸に向かい、車で五分ほど走ったところにれんが造りの建物がひっそりと建っています。

その建物は、「旧海軍大湊通信隊稚内分遣隊幕別送信所」。昭和十六年に始まった太平洋戦争のきっかけを担ってしまった建物でもあります。（以下「赤れんが通信所」と呼ぶ）

建物は三棟あり、一番大きなA棟、望楼が印象的なB棟、一番小さなC棟が最北の厳しい風雪に耐えながら現存しています。

昭和五年、満州事変の前年にこの建物の建築が始まりました。日本が次第に世界から孤立し、戦争という

悲劇に傾いていった時代です。

A棟とC棟は、昭和五年から六年にかけて建築され、B棟は昭和十六年に建てられました。ここで特徴的なのは、A棟とC棟の屋根の小屋組みが鉄骨なのに対し、十年後に建てられたB棟の小屋組みが木造であるという点です。推測ですが、昭和十六年は太平洋戦争が勃発した年であり、すでに鉄が不足していたのではないのでしょうか。

昭和十六年十二月二十七日、大本営より真珠湾攻撃の暗号電文「ニイタカヤマンボレー二〇八（ひとふたまるはち）」が発信されました。ちなみに電文の中の「ニイタカヤマ」は、当時日本領であった台湾の山の

名前であり、富士山より高く、そのときの日本の最高

峰でした。暗号電文は、国内数箇所から送信されましたが、当時、稚内市街地にあった受信所に勤務されていた方が「受信所で暗号電文を受信し、恵北の送信所に送った」と話されており、文書の記録は残っていませんが、この赤れんが通信所からも「ニイタカヤママンボレー」が送信されたものと思われる。

十二月八日午前一時三十分、日本海軍空母機動部隊によるハワイ真珠湾攻撃が行われ、太平洋戦争が勃発しました。我々は、戦争のきっかけを担ってしまったこの場所で、毎年十二月八日に平和の祈りを込めて灯籠を灯しています。



宗谷歴史公園の津軽藩兵詰合記念碑（珈琲の碑）。近隣には宗谷厳島神社や宗谷護国寺など歴史的建造物が建ち並ぶ。



稚内歴史・まち研究会の皆さんによって復元されたカッヘルは今でも現役ストープとして役目を果たしている。



現存する赤れんが通信所の全景。写真手前からA棟、B棟、C棟と並ぶ。歴史的遺産も厳しい自然環境にさらされ老朽化が著しい。現在は徐々に補修を行っている。

■ 稚内の 珈琲物語

時は幕末。蝦夷周辺で狼藉をはたらくロシアに対し、幕府は東北諸藩に蝦夷地警護を命じます。文化四年（一八〇七年）の夏、宗谷警護を命ぜられた津軽藩士たちは、宗谷に着任します。当初は秋まで駐屯の予定でしたが、急遽、明年三月まで駐屯の命を受けます。秋に帰る予定だった津軽藩士たちには、防寒着どころか満足な夜具もありません。やがて冬を迎え、故郷の弘前とは比べものにならない宗谷の寒さに、藩士たちは激しく動揺します。更に藩士たちにビタミン不足による浮腫（ふしゅ）病が追い討ちをかけます。このときの津軽藩士たちは、ロシアではなく、寒さと栄養不足という敵に立ち向かわなければならなかったのです。年が明けた二月。多くの藩士が浮腫病により命を落

としました。

津軽藩は安政四年（一八五七年）にも宗谷警護を命ぜられますが、その頃には浮腫病に対して、珈琲豆に薬効があるということで、幕府から和蘭珈琲豆が配給されたという記録が残っています。その頃は珈琲が一般に回っておらず、当時の庶民が口にした初めての珈琲ではないでしょうか。

宗谷歴史公園にひっそりとたたずむ津軽藩兵詰合記念碑は、珈琲を飲むことができずに亡くなってしまった藩士たちを悼み、その後、薬として珈琲を大切に飲んだであろう先人たちに思いをはせ建てられたものです。

■ 国産実用ストープ発祥の地

安政三年（一八五六年）二月、あと十年ほどで明治維新を迎える蝦夷地で、函館奉行所の梨本弥五郎（なしもとやごろう）は、悩ん

でいました。彼はこの年、妻子同伴で蝦夷最北の地である宗谷に赴任が決まっていたからです。恐らく弥五郎は、五十年ほど前に津軽藩の多くの藩兵が寒さと浮腫病のために命を落としたことを知っていたのでしよう。何としても防寒の手立てを見つけてなければなりませんでした。

函館奉行から、極寒の地での越冬方法について意見を求められたとき、弥五郎は「カッヘル（現在のストープ）の配備を要求します。奉行から製造許可を得た弥五郎は、武田斐三郎とともにイギリス船に乗り込み、写生図を書いて鋳物師に製造を命じます。

同年三月末、弥五郎は家族とともに宗谷に向け出発します。着任して夏も過ぎようとする頃、もしかすると製造が間に合わないかもしれないという知らせが届きます。そのとき函館で製作された「カッヘル」はわ

ずか六個。鋳物師の技術が未熟なために製作が遅れ、しかもできたものはとても重かったのです。「カッヘル」が届かないことを知り、一時は妻子を増毛まで撤退させることも考えましたが、弥五郎は奮起します。「来ないものを待っていても仕方がない。ここ宗谷でカッヘルを作ろう！」。

ここで登場するのが帰属アイヌの景蔵です。彼はもともと鉄砲鍛冶で、鉄砲の修理はもちろん、頼まれれば何でもこなす器用な人でした。弥五郎は紙で模型を作り、製作を頼むと、景蔵は期待に応え、次々と作り出します。彼の「カッヘル」は、鍛鉄製だったため、函館の鋳物製に比べ、一個五十三キログラムと非常に軽く、しかも値段は三分の一と安く仕上がりました。こうして、日本初の実用ストープは、アイヌの協力を得て、宗谷の地で誕生したのです。



(前) 稚内海上保安部交通課

堤 憲一郎さん

古くから海の安全を見守り続けてきた灯台は、地域のシンボルとして沖を行き交う船に光を放っている。

■ 灯台たちの誕生

宗谷海峡は日本海とオホーツク海を結ぶ海上交通の要所であり、明治期においてもその重要性に変わりもなく、特に鉄道や道路などの陸上交通網が未発達のもので、海上交通が主流で大量輸送する手段は船舶しかなかった時代です。

このような時代の中、宗谷海峡など最北の海を航行する船舶の海の道しるべとして、明治十八年宗谷岬灯台が、同三十三年には稚内灯台が誕生しました。宗谷岬灯台は、納沙布岬灯台(根室市)、日和山灯台(小樽市)に次いで北海道で三番目に古い灯台です。いち早く建てられたことがそ

の優先度の高さを物語っています。

■ 宗谷岬灯台のあゆみ

明治十八年、宗谷丘陵に宗谷岬灯台が設置されました。当時の灯塔は鉄造りで八角形と記録されています。しかし、この灯台は明治四十四年五月の山火事により焼失してしまいました。

その後、翌年の大正元年十月に、同じ鉄造りで八角形の灯台が再建され、昭和二十八年十一月には鉄筋コンクリート建ての現在の灯塔に建替えられています。この時、灯塔は白黒横線塗りに塗装されていましたが、昭和五十三年十二月に現在の白地に赤横線塗りに変更されています。

冬の間、背景が積雪で白くなる地域では、白い灯塔に黒色や赤色の帯を塗ることとで視認性を高めています。古くは黒帯だけでしたが、映画「喜びも悲しみも幾年月」を撮影する際、天然色(カラー)フィルムの効果を出すために、石狩灯台(石狩市)の白黒の一部を紅白に塗り替えたところ、これが効果的だったため、昭和三十三年に石狩灯台を白黒塗りに変更し、その後、宗谷岬灯台を含め、多くの灯台が塗り替えられました。

宗谷岬灯台の初代レンズはフランス製で明治十八年に灯台の設置時に据え付けられましたが、山火事により焼損し、現在は現役を退き石川県の道の駅で展示さ



現在宗谷岬灯台で使われているレンズは、英国チャンス・ブラザーズ社製。とても重いレンズは水銀に浮かべられ30秒で1回転する。



サハリンの島影を臨みながら海の安全を見守る宗谷岬灯台



大正元年に建設された2代目の宗谷岬灯台。この頃の灯台は白黒横線塗りに塗装されていた。



平成30年は日本で最初に洋式灯台が起工した年から150周年にあたり、これを記念して海上保安庁では電子版の「灯台カード」を提供している。各灯台の入り口付近で二次元コードを読み取り入手できるので、訪れた際にはぜひゲットしてみてください。

れています。現在、宗谷岬灯台で使用している二代目のレンズは、明治期に輸入されたイギリス製で百年以上にわたり、遠く離れた最北の海を照らしています。

■ 稚内灯台のあゆみ

初代の稚内灯台は明治三十三年に赤色、円形鉄造り、灯塔の高さ十メートルで、ノシャップ岬の丘の上、現在の自衛隊稚内基地の敷地内に建てられました。

後に灯台の建て替え時期となり、ノシャップ岬の先端の海岸に移すことになりました。しかし、灯台の光達距離を変えないためには、海面からの高さを丘にあった時と同じにしなければなりません。そこで、灯塔高四十二・七メートルと、北海道では一番高い灯台が昭和四十一年に完成しました。全国の海上保安庁の管理する灯台では、出雲日御碕灯台(島根県出雲市 四十三・

七メートル)に次いで二番目に高い灯台です。

■ 灯台守の生活

宗谷岬灯台、稚内灯台では、当時いわゆる「灯台守」が常駐していました。灯台守の仕事は、日没に石油灯に火を灯し燃料を補給しつつ、夜中はレンズを回転させるための大変重たい分銅と呼ばれる錘を何度も巻き上げるなど、相当の重労働だったそうです。

また、生活面においても、人気がない岬の先端に住み、井戸を掘っても水は出ない、季節風が強い、遠方までの買い出しといった厳しい生活環境にありました。

■ 地域のシンボル

明治時代から最北の海を照らし続け、これからも海の安全を守り続ける灯台たちと、そこで働いてきた灯台守を紹介してきました。



北海道で一番高い稚内灯台は、ノシャップ岬のシンボルの一つとして訪れる観光客を魅了する。

宗谷岬灯台と稚内灯台は「あなたが選ぶ『日本の灯台五十選』(燈光会)にも選ばれ、宗谷地方のシンボルとして古くから地域の皆様に愛されてきた灯台です。

宗谷にお越しの際には、宗谷岬や野寒布岬などの丘の上から、灯台をめぐるさまざまなドラマやたくさん灯台守たちの生活があったことに思いをはせ、今も変わらず沖を行く船へ光を放つ灯台をごらんいただき、灯台が持つ大切な役割をご理解いただくと幸いです。

Story #4 宗谷を支えた「鉄路」と秘境駅



元幌延町地域おこし協力隊

青柳 太一 さん

マチの発展を支え、
人々の夢と希望を運んだ鉄路は、
今も地域から愛され続けている

■鉄路と樺太

現在の宗谷本線が開通したのは大正時代。開通当時の稚内駅は、今の南稚内駅より少し北に行ったところがありました。南樺太が日本領だった時代には、稚内港の北防波堤ドームに「稚内棧橋駅」という名の駅があり、そこから樺太に向けて連絡船が出ていました。北防波堤ドームには今でもその名残があり、樺太への玄関口であった稚内の様子を感じることができるのです。

■宗谷地域の

二つの鉄路

以前は、宗谷地域のオホーツク海側を駆け抜けていた「天北線」という路線も

ありました。

この路線は惜しくも平成元年に廃止されてしまったのですが、歴史をさかのぼ

ってみると実は宗谷地域の鉄路は、天塩川沿いを北上する現在の宗谷本線のルートよりもオホーツク海側を通る天北線のルートがさきに開通しているのです。この当時、現在の宗谷本線沿線地域は天塩川を利用した水運が活発だったのに対し、オホーツク海側は物流手段が確立しておらず、その結果として、交通が未発達だった地域を優先して鉄道を引いたのだとされています。

そして、地域の期待どおり、宗谷本線と天北線は街の発展に大いに貢献しました。

北の鉄路は樺太とのモノ・ヒトの行き来や地域の

開拓、物資の輸送に活躍し、

沿線地域は活気に満ちていました。

■路線唯一の

トンネルと

幻の旧線

旭川を出発した宗谷本線は、名寄を過ぎると天塩川に沿って蛇行しながらゆっくりと進みます。そして、糠南駅を過ぎると一旦天塩川から離れ、路線唯一のトンネル「下平トンネル」に吸い込まれます。実はこのトンネルを通るルートは付け替え後の新線なのです。

旧線はこの部分も天塩川沿いを走っていましたが、土砂崩れや地すべりなど自然災害が相次いだため、昭和四十年に現在のルートへとその座を譲りました。



付け替え前の旧線跡“下平橋梁”から天塩川を望む青柳さん。「ここから見下ろす天塩川は四季折々の姿を見せてくれるんです。」



投票により決めたキャラクターを描き綺麗に蘇った下沼駅。「お色直し会」は全て地域住民や鉄道ファンなどのボランティアによって行われた。



北海道遺産に選定された稚内港北防波堤ドームには「稚泊航路記念碑」と連絡船に接続した汽車の動輪があり、駅があったことが感じられる。

旧線の一部は道路として利用されており、現在もその姿を見る場所があるので。下平トンネルのちょうど横に架かる「下平橋梁」は、付け替え前の「下平橋梁」を道路として再利用したもので、橋の上を歩いてみると、鉄道橋ならではの橋脚や待避場など、鉄道が走っていた面影がよみがえります。

交通の要だった幌延町

ここからは、私が住んでいる幌延町についてお話ししたいと思います。現在、町内の駅のほとんどが無人数駅となっている幌延ですが、国鉄時代には留萌と宗谷を結んだ羽幌線が接続していたり、幌延駅構内に機関区があったりと、まさに交通の要所でした。ニシン漁や炭鉱開発を支え続けた羽幌線も昭和六十二年に廃止、その面影は既に歴史の流れとともに消え去ろうとしています。幌延駅構内が妙

に開けている姿から当時の様子が感じられます。

地域に愛され続ける鉄路と秘境駅

幌延町にある宗谷本線の駅は八駅中六駅が「全国秘境ランキング」にランクインしており、全国から秘境ファンが訪れます。また、町でも秘境駅を中心とした魅力ある鉄道系資産を観光資源としてまちおこしに活用しています。

秘境駅は、一日数本しか列車は止まらず、辺り一面は自然に包まれている無人駅ですが、昔から秘境駅だったわけではありません。マチの発展と共に鉄道が敷かれ、駅ができ、街ができ、多くの人が鉄道を利用していましたが、時代の移り変わりとともに駅だけが取り残されてしまいました。秘境駅をまわってみると、それぞれの駅で地域の歴史や人々の思いを感じること

ができます。近隣住民の方々が待合所の清掃や管理を行っている駅があったり、待合所には地域の方が昔の写真を飾り、設置された「秘境駅ノート」には訪れた鉄道ファンが思いをつづっています。時代に取り残された秘境駅は現在も多くの方から愛されています。

鉄道は地域の歴史を語り継ぐ財産

秘境駅への旅はぜひ宗谷本線に乗ってきてみてください。駅に降りて耳を澄ましてみると、鳥のさえずりや小川のせせらぎなどが聴こえ、目の前には絶景が広がります。宗谷の自然が創り出す大自然を五感で感じることができなのが魅力です。手つかずの自然の中を一本のレールが続く風景はとても美しいですよ。鉄道は単なる交通手段ではなく街の発展を支えた地域の財産。私は宗谷本線、

秘境駅の歴史を地域の皆さんとともに振り返り、現在も活躍する歴史的遺産としての魅力を訪れてくれた観光客の皆さんへ伝えていきたいです。



幌延町では平成30年から地域住民や警察との連携により秘境駅の巡回パトロールを実施し、鉄道利用者や観光客が安全に利用できるように努めている。